

## 一般大衆と精神貴族

——ヤスパース実存哲学における——

松田幸子

### はじめに

ヤスパースは『大学の理念』の中で、大学教育は精神貴族のために行われるべきであると述べている。しかし現状は学生大衆と呼ばれるような多くの人が入学しており、大学教育が学校化しているのが事実である。学問研究から得られる学問的教養もあまり期待出来ない。それと同時に、包越的な存在者である人間の実存的行き方もよりよい方向に進まなくなっている。

小論では、一般大衆と精神貴族の性格づけを考察しながら、ヤスパース哲学における独特な概念である「包越的な人間存在」を、明晰に把握したい。

### 一 一般大衆と教養

一般大衆の特性。ヤスパースは、平均者すなわち一般大衆 (*Die Menschheit des Durchschnitts oder der Masse* の特性) を次のように説明する。その特性を最終的につかむことは困難であるが、支配的な社会層は、総体的には一つの大衆とみてよい。その人間の過半数を占めている大衆は、人間の天分についていえば自分がすぐれた素質をもっているかのように思っている。ただ、困難に直面した

時だけ「私はそれに対する素質を持っていない」といつて自己弁解する。

一方で自己主張をしながら、都合が悪い事柄に対しては弁解をする大多数の人々は、自分を実力以上にみせ、また実力以上に認められようとする。しかし自分の無能も意識しているので、或卓越者を指導者として高く祭り上げ、その卓越者と比較することによって、その人以外の全ての人々を水平化しようとする。大衆は平等を精神性や能力にまで要求して共通の利害関係をつくっている。従って自己を厳しい訓練によって成長させたりせず、自分の本分や自分の課題をみついたりすることから逃避する。もともと自分の欠陥を自覚し、それによって正しい帰結を引き出す人もいるわけであるが、このような人は平均者ではない。高い水準をもっていることの証拠である。

大衆は自分の声価を高めてくれるものを欲するから、その意味で実力以上に背伸びしようとする。それゆえ選抜を受けようとする。

例えば大学入試選抜である。大学に入ることが大きな特権を伴うと知れば、そしてその特権を受ける程度が大きければ大きい程、多くの人はこの選抜を受けようとする。このようなプレミアムによつては、真に精神的な力の持主は決して得をしない。さも精神的であ

るかのよう外面をつくらうことのできる精神の持主だけが得をするのである。すなわち何事にもそれ自体としての意味を認めず（例えば学問研究そのものに価値を認めず、しかもそれに心からかわらず、外面的にかかわることと利益を得ようとする人々）、また仕事と娯楽だけしか知らない人々、全てを出世の手段とか踏台にする人々や成功に対する社会的経済的プレミアムが、最後の動機であるような人々が得をするのである。

以上のような見解の持主であるヤスパースは、大学というところは、大学に向けられる社会の要求に従えば大学の本質を失ってしまうと考えている。具体的にいうならば、平均者である大衆の意志に迎合すれば大学は単なる知識を教える学校になってしまうと考えるのである。

ヤスパースが「大学の学校化」という場合は次のことを意味する。大学は学問研究をする場所である。大学での研究と専門的修練は、単なる知識と技術を伝達するだけでなく、全体者の理念を目ざめさせる学問性の態度を発展させるところであるから人間の陶冶作用をもっている。すなわち学問による教養を身につけさせることである。それゆえ大学教育の意味は平均以上の精神的意志にもえ、十分な天分に恵まれ、選抜された人々のみが与えられるという点である。しかしながら実際には平均者も入ってくるので、その人々の教育は学校化にならざるを得ない。大学にやってくる学生大衆も何かを学ばなければならないし、ともかく試験に合格できるだけの事柄を学ぶ必要がある。そこで大学側は、講義の為の計画と準備をしなければならなくなる。その為の学習計画を立てて、特定の講義と演習への出席を必須にする。しまいには学習規則まで設けることになるが、そのような一連のことが学校化ということである。

ところどころかかるやり方は、ヤスパースの考えに従えば大学にとつては破壊的な道なのである。学習の自由がなくなればそれと一緒に精神の生命は窒息するからである。精神の生命は、人間が勝手に左右できない流れのなかでこそ、幸運な予期されない成功を収めるのであって、ふつうの製品みたいに作るわけにはゆかないものだからである。しかし学生大衆にとっては、授業計画や学習規則、統制や大量生産等にしばられた常識的な着実さは、技術的能力や試験用の知識には大いに役立つのである。

ここで述べられているヤスパースの大学の理念は、ドイツのベルリン大学創設の時フンボルトによつて考えられた理念を引き継いでいる。

一八〇九年四月よりプロイセンの文相局長官の仕事を引き受けたフンボルトは、在任一年六ヶ月の間にベルリン大学創設をめざしてプロセイン当局に対していくつかの提案をしているが、その中で最も重要なものは、「ベルリン高等學術機関の内外の組織について」という建白書である。ここで彼は、大学と大学以前（高等学校まで）の学校との区別を明確に示している。彼によれば、大学以前の学校は研究が完了している事柄についての知識を伝達することを目的とするが、大学はまだ研究が完了していない未知の問題について、教師と学生が同等の立場に立つて共に苦労しながら研究する場所でなければならない。従つて、大学では教師と学生の関係は大学以前の学校のものとは別なものとなる。すなわち、

学問研究の場では教師と学生の関係は同等であること、従つて学問的な学識の量や熟達の程度はあまり重視されていない。重視されるのは学問研究への熱意や態度である。次に

教師と学生の関係が同等であるということは、共に学問研究に向っている場合のことである。それゆえ、教師も学生も学問研究のために大学に居るのであつて、教師は学生に学問研究を指導するために存在するというよりは、むしろ学生が教師の学問研究を助けるために大学に居るのである。さらに教師も学生も学問のために存在する場合の理想像は、教育において学問の伝統を伝達することだけが尊ばれたり、教師個人の人格への敬服とか教師の教えにただ単に感激することが重視されるのではない。(勿論教育の場では教師への信頼は必要ではあるが) なによりも重視されなければならないことは、学問研究を媒介として教師と学生が同一水準の立場で問答することである。

フンボルトは「ベルリン高等學術機関の内外の組織について」の書き出しを次の言葉で飾っているのである。

「高等學術機関は、国民の道德的文化のために直接的に生ずる一切のものが集合する峰である。このような峰としてのこの機関は、言葉の最も深い最も広い意味での学問に従事し、そして、学問を、精神的倫理的教養のための材料として、つまり意図的ではないがおのずから合目的に準備される材料として、国民の利用に委ねることに基づいている。」

新聞による教養……ヤスパースによれば新聞は、理念としては大衆の教養を大規模に実現する可能性をもつものである。

新聞はいろいろな事実を具体的に目立たない構成の仕方で簡潔に人々の前にはつきり示すために、単なる偶然的なよせあつめにならないようにする。その内容には、最も深遠な専門科学や最も崇高な人格の創造にかかわるものに至るまで、およそ精神的生成するもの

を包括するのである。新聞は専門的なものでも、誰にでもわかるように改造しながらわかり易く紙面をうめていくのである。

毎日山のような印刷物のなかで、既成の言葉を用いて、実に驚くほど簡潔な洗練された洞察をめざす端的な報告の宝物に出くわすということは、度々でないにせよ現代人を満足させるであろう。それらの宝物はここで効果が現われ、現代人の意識に知らないうちに作用を及ぼしている精神的訓練の成果なのである。

現在起っている出来事は、精神がそこに居合わせるだけでは理解されない。肝心なことは、それを数十万の人々のために言葉で表現することであり、瞬間的に飛び出してきた言葉が効果をもつのである。そういう言葉は大衆としての人々が持っている観念のなかに定着するので、事物の成り行きを自分の持ち分だけ掌中に収める最も生活に密接して出てくる言葉なのである。ジャーナリストは出来事の真中にいて、人々の頭のなかの梃子装置を制御する力があることを知っている。

新聞から何が生まれるかは、ひとり読者や実際の諸勢力にかかっているだけではなしに、新聞の精神的な行動をとおして、その立場を定める人々の根源的な意志にかかっている。

ところで、ジャーナリストの最高の可能性が墮落することがある。それはジャーナリズムにおける可能的な責任と精神的な創造性が大衆の諸要求と経済的な諸勢力とに依存してしまふ時である。売れ行きをよくするため幾百万人もその本能を満足させようとして、センセーショナルなものや、理解され易いものばかりで紙面をうめつくし、また経済的な諸勢力に、新聞の内容を規定してもらわなければならない時である。

では新聞をどのように通俗化へと墮落させる大衆の要求するもの

とは何であろうか。その為に、再びヤスパースの大衆の傾向性についての説明を考察してみる必要がある。

ヤスパースによると、大衆の人間とは、全体に基づいて生きることなく、彼の準備や努力を利益に転化する具体的目的がなければ、もはや努力しようとしなないものである。すなわち大衆の人間は機が熟するのを待とうとせず、すべて即座に現在の満足となるのでなければならぬし、精神的なものはそのときどきの瞬間的な楽しみ事になってしまっている。そこでは散文があらゆることを表わすのに適した文学形式であり、新聞が書物に取って代わり、生涯の伴侶となる著作に代わって別種の読みものが読まれる。読み方は速読となり、好まれる読みものは知りたいものでありながらすぐ忘れてしまってもさしつかえないようなものを迅速に伝えてくれるものである。

このような大衆の傾向性において、典型的な価値評価が現われる。新しい思考、新しい生活感情、新しい体育、新しい経営などが価値あるものとされ、つまり何かが新しいならばそれはひとつの積極的な価値をもち、新しくないならば軽蔑的な価値判断がされる。大衆の間でいわゆる教養ある人と呼ばれる人は、目新しく、知的で興味をひくと見られるといったこれら三拍子の資質をもっている人のことを云う。

大衆のこの傾向性に迎合するような新聞は、大衆の真の教養を形成することはできないとヤスパースは述べている。ジャーナリストは、近代の普遍的人間の理念を実現させるには、大衆の要求だけに従ってはならないのである。ジャーナリストは、日々の緊張と現実とのなかに、すっかり身を投じて、そのなかで即自的に正気であることができるのである。彼は時代の精神が一步前進するさいには、

核心に居合わせる地点を求める。ジャーナリストは自分の運命を時代の運命のなかに意識的に巻き込んでいくのであり、無に突き当たるときには驚愕し、苦悩し、拒絶するのである。彼が現代において誠実に存在を感じとるならば、彼は自己本来の精神の高まりを得ることが出来る。そのような状態の中から、彼は、情報を受ける人々のために今起っている事柄を言表し、その瞬間を共に創造する人となるのである。読者に対してそのような精神的創造を要求することが、ジャーナリストの責任である。

## 二 精神貴族と教養

精神貴族の本質。ヤスパースが精神貴族の本質を述べているのは、『大学の理念』の中であり、しかも主に学問研究による教養との関連においてである。

精神貴族は、すべて国民層から生じながらも、本質としてはエートスに、つまり個々の精神が燃え尽きる情熱に基礎づけられていて、いつも少数者なのである。大学の理念はこの少数者に向けられるものである。

精神貴族だけが、大学に入る本当の資格の持主である。精神貴族は大学で学問研究の道に入ったなら、自分がそれを行う為の最善なる者へ招かれていると前提して、そこで身につけるものから（学問による教養）権利の要求をすべきでなくて、そうではなく、そこから自己の義務を導き出す態度を示すべきであるというのが精神貴族主義の主張である。

精神貴族は自己の根源において自由であり、労働者や金持や貧乏人と同様世襲貴族にもめつたに在るものではありえないが研究への素質を有するものは、誰でも研學への道を見出すべきであるという

のが精神貴族主義の主張なのである。従つてそれは封建制と結びついた社会的貴族主義とは異なっている。

精神貴族を精神的奴隷（一般大衆）から区別するものは、次のようなものである。精神貴族は、自己の内面からきこえるかすかな導きの声に耳を傾けながら自らの責任において、自分の道を歩み、座礁することすらも辞さない。それに対して精神的奴隷といわれる者は、自分以外からの指導や命令を欲するのである。そして勤勉であることのみに、その結果を保証してもらおうとする。

以上ヤスパースの精神貴族についての見解の要約である。ここで明らかになっていることは、精神貴族の本質は、自己の根源から自由であり、外からではなく自己の内面からの声に導かれ、自己の責任において自己の道を開き進むのである。そこには、人間とは精神的なものにおいてこそ本来の自己になるのであつて、決して何らかの手段ではなく、主体的個人として究極目的となるべきである。

精神貴族と教養。精神貴族をその本質通りに支えるものは、学問的教養である。

学問による教養 (Wissenschaftliche Bildung) ……学問研究を通しての教養には学問研究の姿勢から形成されるものと学問研究の趣味からのものと二通りに分けてヤスパースは考えている。

学問研究の姿勢から作られる教養とは、客観的認識のためにはいかなる機会にも自己の価値評価を見合わせるこの能力である。それは、自分の党派や自己の現在の意志を度外視して偏らずに事実を分析できる能力なのである。学問研究をする場合には、研究対象へ没頭し、慎重に考え対立する諸々の可能性の探究でもある。この場合、自己の出した結論に対しても懷疑や疑問を抱き、最終的な主張

を慎しみ自分の主張が妥当する限界を吟味するということが学問研究の姿勢の特徴であると、ヤスパースは人間の認識能力は有限であると強く主張している。

前述したような学問研究の姿勢から形成される教養とは、理性に対する教養なのである。

学問研究の内実による教養。自然科学の教養価値は、厳密な現実主義的な理解力を訓練することにある。研究の結果を獲得した手段（方法）が教養的価値をもっている。従つて結果のみを知識として得るのでは精神的教養ではない。すべてはその認識手段をつかむことが大切であつて、結果の受容はほとんど重要でない。

例えば生命に関する研究をとりあげてみる。生命の不可思議さは、次のカントの言葉がよく示している。「われわれが、有機的存在者およびその内的可能性を自然の単なる機械的な諸法則によつて決して十分知ることができないし、ましてや説明することなどできないということとは確実である。しかも、そのような見当をつけることさえも、もしくは、何らかの意図によつて秩序づけられていない自然法則に従つて、わずか一本の草の茎の産出さえも理解させるであろうニュートンのような人が、やがては出現するかもしれないと期待することさえも、人間には不合理であると大胆にも断言できる程に、確実なのである。」今日、生命に関する科学は驚異的な飛躍を遂げてきている。その内容を知るだけでも以前から教養価値を持つていけるとされているのだが、ヤスパースは「教養価値は、自然科学知識が、どの程度まで環境世界を生き生きと観察し、直観し、採用することに転化されるにかかっている」とのべる。単なる自然科学の知識だけでは教養価値にならないのである。

精神科学の教養価値は、自然科学の場合とは異なり、結果それ自体が深い意義をもつとヤスパースは考える。即ち、神話や絵画やいろいろな作品、および人間の現実そのものの内実によって魂が充実されることは、すでに偉大な価値をもつからである。

一と二で一般大衆と精神貴族のそれぞれの教養の持ち方を考察した。その中でヤスパースが教養人と考えている人は次のような能力を身につけた人ということが明らかにになった。

それは、全体性から思考できる人、広い思惟能力のある人、普遍的理念を目指して生きる能力がある人、精神的訓練を受けている人、あらゆるものを根源から考えることの出来る人、等の表現で述べられており、又逆の表現では、自分の出した結論に対しても懷疑や疑問を抱き、自分の主張が妥当するかどうか常に吟味するような慎しみ深い人ともある。

このような表現を使って教養について述べる背景には、ヤスパースの実存哲学的人間観がある。

### 三 ヤスパースの人間観

ヤスパースの実存哲学において、根本的概念は、包越者という概念である。

哲学的論理学第一部『真理について』で最初の中心テーマは、存在とは何かという問題である。ヤスパースによれば「存在とは包越者であり、又包越者から示されるものである」から、そこでは包越者の存在について理論が展開されている。

包越者とはあらゆる地平と視界を包みこんだものであり、その概念は、人間の有限な視野を無限に広めた極限で成立するとある。またそれはわれわれのまぬかれがたい主観——客観の分裂を越え、そ

の両極を包みこむものとして、哲学的論理学の展開のために、ヤスパースによって構想されたものである。

従って包越者とは本来ただ一つであるが、有限なわれわれの前には、その分裂した形で、即ち、包越者の諸様態として現象するといわれる。包越者の諸様態とは客体に関しては世界と超越者として、主体的に関しては現存在、意識一般、精神実存として、それぞれの様態をもつてあらわれる。ヤスパースはこの現存在、意識一般、精神実存をとくに人間存在の諸段階として考えていると思われる。それぞれの彼らの概念説明をもとに人間の生き方を推定してみる。

現存在的な人間の生き方。身体的、生命的な存在として、まだ自己意識に目覚めることもなく、自らをとりまく環境と緊密な関連をもつて生きる。また、過去——現在——未来と流れゆく時間のうちで、本能や衝動に従って生き、自己の維持拡大に役立つものののみ真理として求めながら生きる。

意識一般の立場に立つて生きる。個別的な意識を越えた、どの人も同じように考えそれ以外には考えられない、普遍妥当的なものを愛しながら生きる。具体的に考えると、人間が誰しも従うべきである道徳法則を遵法しながら生きる。数学的な形象や自然法則などのように誰もが正しいと認める客観的な真理に対して知性的愛をもつ。つまり、相対的でなく、普遍妥当的なことのみを真理として求める生活。

精神的立場に立つて生きる。精神としてのわれわれは一つ理念によって統一された世界（国家、社会、文化の領域等）の一員として愛され、所属する喜びをもつて生きるのである。具体的には、この世界は、私の出世、私の家族、私の友人、私をも含む国民と、私

の課題、私の使命をもたつて世界である。精神の段階においては、可能な限り多くの個別的なものを調和させ、統一するものが真理とみなされるのである。

実存的に生きる。超越者より贈られた自己本来的な可能性を求めつつ生きることである。すなわち自分の独自性を守って、他者に付和雷同することなく留りたいという衝動を持つ二人が、交わりをしていく中で本来的自己を互いにみつめようと努力することである。

この実存的交わりを可能にする根源としては愛がある。その愛は盲目的なものでなく、相手の可能性をはっきり正確に見抜く理性的な愛である。

すでに述べたように現存在の立場では実用的真理を求め、意識一般の立場では、それぞれの領域における普遍妥当の真理を求め、精神の立場では、どこまでも調和的な統一の真理を求めた。それでは実存的生き方では、いかなる真理を求めるのであろうか。それは自己を本来的な自己自身の頂点へと、つまり超越者から贈られた可能性を実現しつつ生きることを真理と考えるのである。このような真理はヤスパースによれば哲学的真理にふさわしいのである。哲学的真理とは具体的にどのようなものかを明らかにする意味で、科学的真理と比較しながらヤスパースが示した次の例を考察してみる。

ヤスパースは、ガリレイ（一五六四—一六四二）とブルーノー（一五四八—一六〇〇）が同じく地動説を支持して断罪された時、二人がとった態度を比較している。

ガリレイは一六三二年『天文対話』を出版して、その中でコペルニクスの地動説の正しさを主張し、宗教裁判にかけられた。そこで彼は地動説を放棄して、自宅での謹慎をしながらもひそかに研究を続け「それでも地球は動く」と云ったのである。そのような態度を

ガリレイがとることが出来たのは、科学的真理というものは、彼が自説を取り消すと否にかかわらず、客観的な真理としてあり続けると考えたからであるとヤスパースは解釈する。

ブルーノー（一五四八—一六〇〇）は自説を曲げず八年の獄中生活の後一六〇〇年二月に火刑に処せられた。彼の死は犬死と解釈できないだろうかと疑問に対してヤスパースは「否」と答える。その理由は、ブルーノーが主張しなかったのは、人間と無関係に地球が動くということではなく、むしろ、あく迄も、地動説という真理を主張しようとしている自分自身の立場の一貫性だったのである。

科学者であるガリレイが客観的真理に重点を置いていたのに対して、哲学者であるブルーノーは主体的真理（真実）に重点を置いていたとヤスパースは解釈するのである。

哲学的真理は個々の人間の生き方や在り方に本質的にかかわるのであり、その限りでは科学的真理のように万人に対して強制的な普遍的命題ではあらわすことはできないものである。

従って実存的生き方において、求める真理は、それぞれの個人によつて異なるものである。それゆえ、自分が生きる目標をいかに正しさと確信しても他人に強制することは出来ないのである。

#### 四 実存的生き方と教養

ヤスパースの実存哲学では、人間の存在の在り方を現存在、意識一般、精神、実存の四つの段階に分けて考えられるとしてはいるが、現実にはこれらが自己の実存の方向に統一されていく事が理想的とみられている。つまり他の三つ段階の生き方を含みながら実存的生き方を目指すということである。

ところで、ヤスパースによれば、現存在、意識一般、精神としての自己は本来的な自己ではなく、本来的な自己は実存である。現存在、意識一般、精神としての自己はわれわれにとって認識の対象となる。私は身体をそなえた対象的なものとして自己を反省することのできるし、あるいは他者同様に思惟し行為するものとして自己を考へることが出来る。しかし「実存は決して認識の対象とはならないものであり、そこからして私が思惟し行為するところの根源となるものである」。それゆえ実存とは、思惟や反省の対象としてはとらえられない自己である。言いかえるならば、あるがままの自己ではないということでもある。人は誰でも、私は現在のこのままの私より、もつとましな人間になれるような可能性をもっていると思うものである。しかしその可能性は実現してみなければわからない。私は、自分の可能性をいろいろと考え、状況に応じて努力しながらあれかこれかの事柄を、自由に意志して決断して行為して人生を送る。この行為の主人公となるのが私自身であり、真実の私そのものという私の実存である。実存とは、他の人とは置きかえられない本来的自己をもとめて、つねに自己の生き方を選択、決断し、自己を実現してゆくその過程において存立しうるものである。その自己の可能性とは実は、自己を超越しているもの（神）から、被造物としてのわれわれに贈られたものである。「自己存在の深みは「その前に私が立っているところの超越者の中にその規準をもっている」のである。自己のそのような本来的な姿を見つけるためには、広い視野、奥深い根源からの洞察力が必要である。また純粹に明晰に物事を見ることの出来る眼力が必要である。それがヤスパースのいう教養である。「より高い教養のうちにあつては、実存が最も明晰に決然としている状態へと高まって行く条件が存在しているのである」

そして、その教養とは学問的教養がより高いのである。前述したように単なる知識や技術ではなく、学問研究によって手にすることのできる高度な正しい認識手段である。ヤスパースの人間観からみると、一般大衆と精神貴族の大きな違いは、単なる知識を多くもっているとかでなく、学問研究による教養をもっているか否かである。即ち真に実存的に生きる能力があるか、否かで決まる。

#### 参考文献

Karl Jaspers, *Existenzerhellung* (1936)『実存開明』草薙正夫他訳  
Karl Jaspers, *Die Idee der Universität* (1946)『大学の理念』

森昭 訳

Karl Jaspers, *Von der Wahrheit* (1947)『真理について』

小林靖昌 訳

「学問と教養について」長野大学紀要 第四巻第三・四号併号

松田幸子

「ヤスパースの教育哲学」上田女子短期大学紀要十五号

松田幸子